Holocaust and Rumania (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44908

ホロコーストとルーマニア（後篇）

野　村　真　理

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ルーマニアの国境変更とユダヤ人
⑴　大ルーマニアの誕生
⑵　ルーマニアのユダヤ人
Ⅲ　ルーマニア人のルーマニア
⑴　アントネスク政権の成立
⑵　ヤシのポグロム
Ⅳ　民族浄化政策の始動
⑴　ミュンヘン作戦

（以上，第36巻第１号掲載）

⑵　ユダヤ人追放の開始と中断
Ⅴ　ガス室なきホロコースト
⑴　トランスニストリアの無惨
⑵　ポーランドか，パレスティナか
Ⅵ　ルーマニアにホロコーストはなかった？
⑴　アントネスク政権崩壊
⑵　ルーマニアのホロコースト認識の問題点

Ⅳ　民族浄化政策の始動

⑵　ユダヤ人追放の開始と中断

ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の追放は，ミュンヘン作戦の完了を待たず，トランスニストリアに展開するドイツ軍の了解もないまま，性急に開始された。ルーマニアのホロコーストに関する文書館史料集全12巻[12]を編

集，刊行し，大著『ルーマニアにおけるホロコーストの歴史』(2011年)を著したアンチェルは，７月末あるいは８月はじめまでに，３万から３万2000人のユダヤ人がドニエストル川東岸に追放されたと推定するが，この時期，現地のルーマニア軍によって執行された追放の詳細は，ルーマニア政府の首脳部も把握しきれていなかった[13]。

自著でアンチェルが，最も早い時期に執行された大量追放として取りあげているのは，ミュンヘン作戦の初期段階で奪還された北ブコヴィナやベッサラビア北部のユダヤ人約２万5000人にかかわるものである[14]。彼らは，もとの居住地を出発してベッサラビア最北部の村コスラルに集められ，７月24日，ドニエストル川をはさんで対岸の村コズロフに追放された。ユダヤ人の移動を指揮したのはルーマニア軍だが，事前にコズロフには，当地へのユダヤ人追放に関して何も知らされていなかった可能性が高い。ユダヤ人はコズロフで３日間，何の手当もなく野外に留めおかれ，すでにそれまでの長距離移動と飢えや渇きで身体が弱っていた者は，折しも降り続く雨のなかで衰弱死した。その後，ようやく一団は500人から1000人のグループにわけられ，周辺の村やコルホーズの建物に送られる。しかし，この地域に駐留するドイツ軍将校は，ユダヤ人の収容を認めず，彼らを，近郊では比較的大きな都市であるモヒリウ・ポジリシキ(ロシア語称モギリョフ・ポドリスキー)に移動させるよう命じた。予期せぬ大量のユダヤ人の管理に問題を感じたための判断ではないかと推測されるが，詳細は不明である。

モヒリウ・ポジリシキより下流に位置するドニエストル川東岸の町ヤンピリでの混乱については，ドイツ軍側が残した数通の文書により，やや詳細に状況を知ることができる。文書によって事件の日付けに食い違いが見られるが，ヤンピリ現地のドイツ軍司令官が７月29日付けで作成した文書[15]と，状況調査のため７月31日に現地入りしたドイツ第11軍の憲兵隊将校が８月１日付けで作成した報告書[16]等を合わせ読めば，事件は，７月28日の朝７時頃，ルーマニア軍兵士に引率されたユダヤ人5000人から6000人がベッサラビア側から橋を渡り，ヤンピリのドイツ軍管轄地域に追放されたことに始まる。ルーマニア軍は橋を渡った時点でユダヤ人の管理を放棄したため，ユダヤ人は自力で寝場所と食料を求め，街をさまよった。しかし，戦闘終了後のヤン

ピリの町は原形を保ってはいたものの，大半の家は略奪，破壊されて空となり，多数のユダヤ人が寝泊まりできるところはなく，食料も手に入らない状況だった。そのため現地司令官は，10時半，ユダヤ人の処置に関してドイツ第11軍司令部に指示を仰ぐ。これに対応して司令部は，ルーマニア軍参謀本部に対し，７月30日付けで次のようなユダヤ人追放停止要請を送った。

> 「ヤンピリ市街司令官の報告によれば，ヤンピリに，ルーマニア当局によってドニエストル川東方へと追放された数千人のユダヤ人がおり，女，子供，老人も含まれている。これら大量の者たちの監視は行われず，支給食糧も確保されていなかった。そのため彼らは生命をつなごうと，がつがつとヤンピリの町を歩き回っている。すでに多くの者が飢えている。
>
> 駐ルーマニア・ドイツ軍総司令部は，以下のことに注意を喚起せざるをえない。すなわち戦線後方地域における大量のユダヤ人の集合と移動は，軍の補給を深刻な危険にさらす恐れがあり，したがって容認できないということである。[中略]
>
> それゆえドイツ軍総司令部は，ユダヤ人あるいはロシア人のドニエストル川東方へのさらなる追放を阻止する措置をこうじた。[中略]
>
> 軍の補給をこれ以上危険にさらすことのなきよう，緊急に措置をこうじられるようお願いする[17]。」

上述のドイツ第11軍憲兵隊将校の８月１日付け報告書によれば，第11軍司令部の指示にもとづく措置であるかどうかは記されていないが，ヤンピリのドイツ軍は７月30日，ユダヤ人5400人をヤンピリから対岸のソロキに追い返す。ところが，同日の夜９時半と翌朝３時頃，ルーマニア側は再びユダヤ人を600人から700人のグループにまとめ，橋を渡ってヤンピリ側に追放しようとした。この企てはドイツ軍によって阻止されたが，報告書がフォローしているのは，７月31日の夕方時点で新たな動きは確認されないというところまでである。

７月28日にヤンピリの現地司令官から報告を受けたドイツ第11軍司令部は，ルーマニア側に７月30日付けのユダヤ人追放停止要請を送るに先立ち，７月29日付けの極秘扱い文書[18]で，今後，このような事態の発生を阻止するため，特別行動隊Dならびにドニエストル川付近に展開する部隊に対し，渡河地点の封鎖と監視を指示した。これらドイツ軍の対応を見れば，７月末時点でドイツ軍が，ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人のトランスニストリアへの

追放を予期していなかったことは明かだ。ところがルーマニア軍はユダヤ人に対し，追放がドイツ軍の指示であるかのように説明していた。８月１日付け報告書の作成者である憲兵隊将校は，ヤンピリのドイツ人将校がユダヤ人から聞き取った話として次のように記している。

> 「[ドイツ語のできるユダヤ人が語ったところによれば,]ルーマニア人兵士は，ユダヤ人に対して繰り返し，これらユダヤ人に対する措置は駐ルーマニア・ドイツ軍総司令部の指示にもとづくと言ったとのことである。ユダヤ人は，ドイツ軍将校に対し，自分たちは全員，ゆるゆるとなぶり殺しにされているような状態だ，いっそのこと一気に撃ち殺してはくれまいかと，何度も哀願した。ルーマニア人の引率者や橋の守備隊は，捕らえたユダヤ人の持ち物を丸ごと略奪し，奪ったカネは袋に集められた。兵士たちはそれぞれ12個もの腕時計をものにしたとのことである。あるドイツ人の下士官は，引率兵が，行列に遅れたユダヤ人の若い女性を穀物畑に連れ込み，強姦するのを目撃した。移動のあいだ，妊婦が数名，野外で出産したが，面倒を見る者はおらず，その場に置き去りにされた[19]。」

８月４日にドニエストル川西岸のオタキで発生した虐殺については，ブコヴィナのストロジネツ近郊の村から連行された２人のユダヤ人女性の，時期的には８月20日以前のものと推定される証言が残されている。２人がソロキのルーマニア憲兵隊詰め所で語ったところによれば[20]，ストロジネツ近郊から集められたユダヤ人約300人は，まずチェルナウツィに送られ，そこからルーマニア人の兵卒と憲兵隊員の監視のもと，徒歩で移動し，8月４日の14時頃オタキに到着した。しかし，オタキでこれらユダヤ人を収容することはできず，オタキ対岸のモヒリウ・ポジリシキに追放してもドイツ軍の受け入れ拒否が予想されたため，やむなく同日の夜，彼らはドニエストル川岸を上流に遡り，ヴォルチネトの村まで連行された。そのさい彼らはチェルナウツィに戻ると聞かされていたが，実際には，彼らを引率したルーマニア人兵士らに持ち物すべてを強奪された上，川縁で10人ずつのグループにわけられ，射殺された。300人のうち，生き残ったのは50人から70人ぐらいであったという。

ルーマニア軍による性急なユダヤ人追放が引き起こした混乱に対し，ブカレストのドイツ公使テオドール・エルガーリンクは，８月７日付けでチェルナウツィに滞在するI･アントネスクの全権代表に対し，ドニエストル川東岸へのユダヤ人追放をただちに停止するよう要請する。トランスニストリアに

展開するドイツ軍からブカレストによせられた苦情によれば，同地の食糧事情は逼迫しており，軍は追放されたユダヤ人を再びブコヴィナに送還せざるをえないというのである[21]。

なぜ，このような混乱が発生したのか。ルーマニアの言い分は別だった。上述の，ヤンピリのドイツ人将校がユダヤ人から聞き取った話にも現れているように，ルーマニア政府および政府の意を受けたルーマニア軍には，1941年３月にブカレストを訪問したドイツ特使ならびにヒムラーとM・アントネスクの会談，さらに独ソ戦開戦直前の６月12日に行われたI・アントネスクとヒトラーの会談で，北ブコヴィナとベッサラビアにおけるルーマニアの主権の回復ならびに両地域からのユダヤ人の追放に関し，ルーマニアとドイツのあいだで事前の了解が成立したとの認識があったからだ。1941年８月16日付けでブカレストのドイツ公使館がベルリンに送った報告によれば，同日，I・アントネスクは，トランスニストリアに追放されたユダヤ人のベッサラビアへの送還は，「東欧ユダヤ人の扱いに関して，ミュンヘンで総統が彼[I・アントネスク]に与えた指針に反している」との抗議を行っている[22]。

しかし，抗議に先立ちすでにルーマニア政府は，現状では当面ユダヤ人の追放を中止せざるをえないと判断していたものと思われる。ブコヴィナからベッサラビアまで移送された者たちを含め，ベッサラビアにいたユダヤ人は，８月末までに，ヴェルトゥジェニ，エディネツその他に設置されたトランジット・キャンプか，あるいはキシナウのようにそれぞれの居住地に設置されたゲットーに集められた[23]。そこで彼らは，トランスニストリアへの追放開始を待つことになる。それらキャンプのうち，一旦，ドニエストル川東岸に追放された後，再び西岸に送り返されたユダヤ人の多くが収容されたのが，ドニエストル川岸のヴェルトゥジェニのキャンプであった。ヴェルトゥジェニのキャンプは，８月11日頃，ヴェルトゥジェニ村郊外のドニエストル川を見晴らす丘の上に設置され，８月17日，約１万3000人のユダヤ人が到着した。その後，収容者は８月23日には２万3000人，その２週間後には２万6000人に達する[24]。最初のキャンプ管理者になったアレクサンドル・コンスタンティネスク大佐は，到着したユダヤ人のあまりにも悲惨な姿に衝撃を受ける。

「彼らは，どう言えばよいのかわからないほど消耗しきっていた。［中略］ うんざりさせられるような人間たちの混合…女，子供，少女，男，病人，死にかけた者，妊婦…彼ら全員に食べさせることもできなければ，十分な寝場所を用意することもできない。［中略］ 私の目の前で数人のユダヤ人が死に，気絶し，出産した。全員がシラミとできものに覆われている[25]。」

1930年のベッサラビアのユダヤ人口は20万6958人（総人口286万4402人）であるが[26]，1940年のソ連併合後や，独ソ戦開戦直前，直後のユダヤ人口の移動について，はっきりしたことはわからない。1941年12月にルーマニアで作成された報告書によれば，８月末時点でベッサラビアには７万5000人から８万人のユダヤ人がおり，トランスニストリアへの追放開始までに２万5000人が死亡あるいは殺害されたとされる[27]。

ベッサラビアでルーマニアによる軍政の最高責任者となったコンスタンティン・ヴォイクレスクは，８月27日付けの新聞『クレントゥル』紙上で次のように述べた。

「ベッサラビアのユダヤ人問題は解決した。もはや今日（こんにち），ベッサラビアの村にユダヤ人は存在しない。街では，残った者たち［ユダヤ人］のためにゲットーが設置された[28]。」

Ⅴ　ガス室なきホロコースト

⑴　トランスニストリアの無惨

第Ⅳ章第１節で述べたように，1939年のソ連の統計によれば，トランスニストリアのユダヤ人口は33万1000人だが，約20万人が南部の港湾都市オデッサ周辺に集中する以外，ユダヤ人は，トランスニストリア中央の町バルツィより北に多く住む。独ソ戦開戦直後のトランスニストリアでは，ソ連軍への徴兵やブク川東岸への避難によって現地のユダヤ人口が失われた一方，ブコヴィナやベッサラビアからユダヤ人難民が流入した。ドイツ・ルーマニア同盟軍が攻め込んだ時点で，どの程度のユダヤ人口が存在したのかはっきりしないが，オデッサを含め，15万人か，あるいは20万人以上が残っていた可能性も排除できないとされる[1]。これらユダヤ人のうち，ドイツ軍に同行した

特別行動隊Dの主導により，戦闘の初期段階でどれほどのユダヤ人が殺害されたのか，これもはっきりしない[2)]。最初の殺戮を生き延びたユダヤ人は，それぞれの居住地に設置されたゲットーか，にわか作りのキャンプに集められた。以後のトランスニストリアで，現地のユダヤ人ならびにブコヴィナ，ベッサラビアから追放されたユダヤ人に対するガス室なきホロコーストの執行者となったのは，8月30日のティギナ協定でこの地の行政権を握ったルーマニアである。

なかでもルーマニア版バービイ・ヤールとして記録されるべきは，1941年10月のオデッサの虐殺であろう。

8月なかばに始まるオデッサ攻略戦で，主力はルーマニア第4軍であり，ドイツ第11軍は補助に回った。3ヶ月におよぶ戦いの後，10月16日，ようやくオデッサは陥落したものの，ルーマニア軍の犠牲は，当時のドイツ側の推定によれば，戦死者2万人，不明者1万5000人，戦傷者7万6000人という甚大なものであった[3)]。ルーマニアの戦争目的はブコヴィナとベッサラビアの奪還であり，オデッサ攻略のためになぜこれほどの血を捧げなければならないのか，ルーマニア国内では批判の声があがったという。その傷だらけのルーマニア軍にさらなる衝撃を与えたのが，10月22日夕方のルーマニア軍オデッサ司令本部の爆破であった。オデッサ市内で司令本部が陣取ったのは，ソ連時代に政治警察NKVD(内務人民委員部)本部がおかれた建物だったが，撤退前，ソ連軍が仕掛けた爆弾が爆発し，66人ないし67人の死者が出る。少数のドイツ軍関係者以外，ほとんどはルーマニア軍の将校と兵士だった。

これに対してI・アントネスクは，23日早朝着信の電報で，報復として，「爆破で死亡したルーマニア軍あるいはドイツ軍の将校1人につき200人の共産主義者を処刑すること。兵士の場合は1人につき100人を処刑すること[4)]」を命じ，さらに24日の電報で以下を指示した。「1．ベッサラビアからオデッサに逃亡したすべてのユダヤ人を処刑すること。2．1941年10月23日の3161指令に該当し，まだ処刑が執行されていないすべての者およびその他の理由で指令の該当者となりうるすべての者は，あらかじめ爆弾を仕掛けた建物に閉じ込め，[建物ごと]吹き飛ばすこと。爆破は，われらの犠牲者の埋葬と同日に執行されるべきこと[5)]。」

10月23日から25日のオデッサで何があったのか。同時代史料の記述には食い違いがあり，詳細を再現しきれないのだが，ユダヤ人の射殺はI・アントネスクの指示より前，すでに22日の夜のうちに始まっていた。死体は見せしめのため，メインストリートに面した建物のバルコニーや，市内の目立つところに吊された。22日，23日の両日に市中で殺害された者の数は，ルーマニア第38歩兵連隊の10月25日付けの報告書によれば417人である[6]。さらに24日，25日の両日，２万人から２万5000人と推定されるユダヤ人がオデッサの西方５キロに位置するダルニッチ村に連行され，一部は，ルーマニア軍によるオデッサ包囲のあいだに掘られた対戦車用塹壕の縁で射殺された。しかし，これでは大量虐殺を行うのに手間がかかりすぎるためか，残りの者の多くは４棟の倉庫に詰め込まれ，マシンガンを撃ち込まれた後，３棟にガソリンがまかれ，火が放たれた。残る１棟は，ルーマニア軍司令本部が爆破されたのと同じ時刻に爆破された[7]。

話をブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人にもどせば，トランスニストリアへの追放は，前章で述べたように８月はじめに一旦，中断された後，ティギナ協定をへて９月なかばに再開された。最初に出発したのはヴェルトゥジェニ・キャンプのユダヤ人である[8]。10月６日，ルーマニア軍総司令部は，ルーマニア第４軍に対し，トランスニストリア現地のユダヤ人と，ブコヴィナ，ベッサラビアから追放されたユダヤ人を区別することなく，ユダヤ人すべてをブク川沿いに設置されたキャンプに収容せよ，とのI・アントネスクの指令を伝えた[9]。（本稿前篇の**地図５**および本後篇の**地図６**参照。）トランスニストリアの総督ギョルゲ・アレクシアヌもI・アントネスクから同じ指令を受けており，アレクシアヌは，指令に関するルーマニア第４軍司令官からの問い合わせに対し，10月11日，指令の執行状況を次のように報告している。

> 「[I・アントネスクの]指令にしたがい，ベッサラビアおよびブコヴィナのユダヤ人すべてを強制退去させ，ブク川西岸地域に移動させることになっている。彼らは，ドイツと交わされた合意にもとづきブク川東岸への移送が可能になるまで，今秋は当地に留まることになるだろう。目下，これらユダヤ人は，日ごとに1000人ずつのグループにまとめ，３種のルート，すなわちルブニツァ－バルズーラ－クリヴォエ・オゼロ－ペロヴォマイスク，ヤンピリ－オルゴポール－サウラン，モヒリウ－

トゥールチン－ブラスラウの３ルートで移動させる予定である。［中略］ 現在までに１万5000人を超えるユダヤ人がトランスニストリアに入り，彼らの収容場所となるべき集合地点に送られた。残りの15万に達する者たちは，この秋のうちにも到着するだろう。［中略］

トランスニストリアのユダヤ人も，ベッサラビア，ブコヴィナのユダヤ人と同様に扱われる。すでにしかるべき措置が開始されている[10]。」

実際，ブコヴィナ，ベッサラビアからの追放は，この報告書が書かれた10月に入って本格化する。キシナウでは，７月のゲットー設置後，８月に執行されたアクション[11]を生き残ったユダヤ人の移送は10月４日に始まり，31日に終了した。11月はじめにキシナウでは，ナチ用語でいう「ユダヤ人浄化(Judenrein)」がほとんど終了した。(**写真４，５**参照。)

チェルナウツィでは，10月13日から15日にかけて第１弾が出発したが，移動には，貨車が使われる場合と徒歩の場合があった。後に回想録を出版するルート・グラスベルクの一家は，約2000人の集団で家畜運搬用の貨車に詰め込まれ，11月にチェルナウツィを出発する。４日後に到着したのは，ベッサラビアのマルクレシュティのトランジット・キャンプだった。そこで集団は二つにわけられ，半数はオタキ経由でモヒリウ・ポジリシキに向かい，ルートの一家を含む半数は，オタキより下流の渡河点ヤンピリに向かった。ヤンピリで一行は，放棄されたコルフォーズで数日間待機させられるが，寝場所となった建物に片づけられもせず散乱していたのは，移動の途上で力つきた先発のユダヤ人の死体だった。最終目的地であるブク川沿いの町ベルシャドへの到着は，チェルナウツィ出発から約２週間後である[12]。

移動が徒歩で行われる場合，老人や女，子供など，歩行に遅れる者は引率の憲兵隊員から容赦なく殴られ，動けなくなった者は射殺された。死の行進で放置された死体は，周辺地域の農民が衣服や靴を剥ぎとった後，野犬が食い荒らすにまかされた[13]。

だが，こうして追放が本格化する一方，トランスニストリアのユダヤ人の管理に関して，ルーマニアには長期的構えは何もできていなかった。前章第１節で述べたティギナ協定の第７条について，ルーマニア政府と現地のドイツ軍の理解は異なる。ルーマニア側の解釈では，ブク川東岸がドイツ軍の支

配下に入れば，第７条でユダヤ人の移動を禁じた前提が消え，ただちに東岸へのユダヤ人追放が可能になるはずだった。独ソ戦の前線は，９月にはブク川よりはるか東にまで前進しており，したがってルーマニアの当局者は，ユダヤ人の追放はこの秋のうちにも開始可能と考えていたと思われる。電撃戦であるべき独ソ戦の長期化や，まして敗北など，ルーマニアにとってはあってはならないことだ。I･アントネスクの指令でブク川沿いに設置されたキャンプはどれも，大量の収容者の長期収容を想定しないトランジット・キャンプで，ソフォーズやコルフォーズの倉庫や家畜小屋が転用された粗末なものだった。しかし，事態はルーマニアが期待したシナリオどおりには進展しなかった。ブク川東岸のドイツ軍は，独ソ戦が最終決着しないかぎり，大量のユダヤ人の受け入れを拒否したからである。11月１日付けでアレクシアヌは次のように報告する。

> 「ユダヤ人問題は困難さを増している。当方の予想をはるかに超える数のユダヤ人が送り込まれ，また，寒さと通行不可能な道路といった目下の諸状況のもとで，割りあてられた場所への彼らの移動は，きわめて厳しい条件下で行われている。ベッサラビアとブコヴィナからだけでも，北部の通過点を越え，５万人以上のユダヤ人が流入した。さらにいまヤシキから，それぞれ１万から１万5000人規模の集団が移動を開始している。こうした事態に対して当方は，食糧の支給ができるように，ユダヤ人は段階的に送り込まれるべきことについて，あらゆる関係当局の合意をとりつけた。特に疲弊した南部地域では，彼らに一切れのパンすら与えることができない。ユダヤ人の健康状態は最悪である。当方の医師たちはみな現場に出て，病人を隔離し，住民への感染を防いでいる[14]。」

1942年４月のベッサラビアおよびブコヴィナからの報告によれば，1941年秋の第１段階でベッサラビアからトランスニストリアへ追放されたユダヤ人は５万5867人，ブコヴィナからベッサラビア経由で追放されたユダヤ人は９万1845人で，合計約15万人にのぼる[15]。死の行進による衰弱，食糧の欠乏，衛生設備どころか満足に身体を横たえるスペースすらないトランジット・キャンプの劣悪な環境，これらいくつもの要因が重なり，ユダヤ人のあいだで飢餓チフスが発生した。チフスは，彼らの移動にともない現地住民にも感染して，トランスニストリア全体に広がった。特に，ベッサラビアから送り込まれるユダヤ人に加え，オデッサならびに南トランスニストリア方面から

大量のユダヤ人が送り込まれたゴルタ県の様相は危機的であった。

1941年11月13日付けのゴルタ県知事モデスト・イソペスクの報告によれば,ベッサラビアのドニエストル川沿いの街ルブニツァからゴルタに向かうルート上のヴァズドフカのトランジット・キャンプには1万5000人が収容されていたが,そのうち8000人がチフスと飢えで死亡した。生き残った7000人はブク川沿いのボグダノフカのキャンプに送られることになっていたが,すでにボグダノフカには彼らを受け入れる余裕はない。ところがイソペスクのもとには,同じくゴルタに向かう道筋のクリヴォエ・オゼロのトランジット・キャンプにいるユダヤ人に加え,オデッサ方面から5万人ものユダヤ人がボグダノフカに向かっているとの情報が入っていた[16]。

11月19日付けでイソペスクは,トランスニストリア総督アレクシアヌ宛てに次のように報告する。

> 「ドニエストル川西岸よりユダヤ人男女の集団が送り込まれ,[ゴルタ県]ルバソフカ区のグヴァズドフカ村に収容された。多くの者は,長期間の徒歩での移動で消耗しきり,そこで死亡した。残った者たちは,ブク川沿いのボクダノフカに移された。ボクダノフカには近隣の町や村からもユダヤ人が送られ,さらに1集団はオデッサ方面から到着した。これで現在ボクダノフカのソフォーズ[を転用したキャンプ]には,さらに約1万1000人のユダヤ人が入れられたことになる。とはいえこれらの者たちには,もうほとんど収容場所は残っていない[17]。」

ボクダノフカでユダヤ人のキャンプに転用されたのは,もとはソフォーズの牛や豚の畜舎である。ボクダノフカの生還者の戦後証言によれば,イソペスクが報告書を執筆した11月なかば,「毎日,寒さと病気と飢えで多くの者が死んだ。死体は,馬や牛のえさの保存所だったサイロに満杯になるまで投げ込まれた。そのような[死体]貯蔵所が数カ所あり,ユダヤ人はそこに[死体を]棄てるように命じられた。こんなにも多数の死体を埋葬するのは不可能で,死体は豚のえさの保存所に投げ込まれた[18]。」12月なかばには,さらなる到着者で,ボグダノフカの収容者は推定5万2000人に達する[19]。

こうした状況を踏まえ,12月11日付けでアレクシアヌはI・アントネスクに対し,現時点でのトランスニストリアのユダヤ人の状況を次のように報告した。

「トランスニストリアには，現地のユダヤ人加え，今秋，当地に到着したユダヤ人や，保安上の理由から当地に移送されたユダヤ人が11万5000人以上存在している。こうした措置が決定された段階では，われわれは，今秋，当地に入る予定のユダヤ人の総数は５万人を超えることはないと聞かされていた。これら［トランスニストリアに入った］ユダヤ人は，予定された収容地へと連行されたが，あまりにも人数が多く，彼らすべてを収容地に受け入れることは不可能であった。そのため，他の地域にも移動させざるをえなかった。［中略］

［こうした収容地には］さらにトランスニストリア現地のユダヤ人，多くは強制疎開させられた者たちだが，そのような現地のユダヤ人がおり，加えてオデッサから来たユダヤ人も存在している。［中略］

トランスニストリアのユダヤ人問題解決のため，［彼らを］ブク川東方へと追放すべく，目下われわれはドイツの当局と交渉中である。ゴルタのようないくつかの地点では，ユダヤ人の一部はすでにブク川を渡り始めている。

ユダヤ人のブク川東方への追放に関するハーフェ＝タタレアヌ協定［ティギナ協定］が執行されないかぎり，トランスニストリアに安定秩序がもたらされることはないだろう。［中略］

当方の見解では，オデッサにおいても，トランスニストリアにおいても，ユダヤ人問題はラディカルに解決されねばならないが，これは，ドイツ側と合意が成立しているとおり，トランスニストリアからユダヤ人を一掃し，ブク川東方へ追放することによってのみ達成されるのである[20]。」

この報告書でアレクシアヌは，ブク川東方へのユダヤ人追放の可能性になお望みをつないでいるように見える。しかし，ドイツ側は，少数のユダヤ人を労働力として利用するにとどまり，衰弱した大量のユダヤ人の受け入れなど論外との立場を変えなかった。ドイツの了解なく向こう岸に送られたユダヤ人は，トランスニストリアに送り返された。将来的にはブク川東方への追放が可能になるとしても，アレクシアヌは目前に差し迫った危機を放置することはできず，おそらく，上記の報告書作成の時点ですでに，ゴルタ県に集中したユダヤ人の殺害による除去を決意していたのではないかと推定される。主たる殺害執行者として使われたのは，キシナウ生まれのウクライナ人アファナシイ・アンドルーシンが率いるウクライナ人警察部隊であった。ボクダノフカ・キャンプでの殺害は12月21日に始まる。ユダヤ人は２組にわけられ，歩行が困難な病人，老人，衰弱者4000人から5000人は，納屋に追い込まれて焼き殺された。それ以外は300人から400人のグループで近郊の森の谷の

縁まで連行され，4日間で約3万人が射殺される。その後，クリスマスの中断をはさみ，12月30日から31日までに残りの1万1000人が射殺されたが，射殺を待つあいだに多数が凍死したという[21]。

ボグダノフカ南方のドマネフカ・キャンプには，1941年末，おもにオデッサ方面から送り込まれたユダヤ人約2万人が収容されていたが，状況はボグダノフカと同様であった。チフスの蔓延で管理不能になったユダヤ人の射殺は，1942年1月10日に始まり，2月まで続いた。射殺の主たる執行者として使われたのは，ここでもウクライナ人の警察部隊である[22]。

⑵　ポーランドか，パレスティナか

第Ⅲ章第1節で述べたように，独ソ戦におけるI・アントネスクの目標は，民族的に浄化されたルーマニア人の大ルーマニアの回復，とりわけユダヤ人なき大ルーマニアの回復である。ルーマニアの民族浄化執行に対する強固な意志は，1941年を通じてI・アントネスク本人により，あるいは彼の意を受けた政府や軍の首脳によって繰り返し表明された。そのさい，追放されるべきユダヤ人に地域的例外はなかった[23]。

しかし，民族浄化の第1段階として執行されたブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人追放は，前節で述べたとおり，ルーマニアが管轄するトランスニストリアで大混乱を引き起こした。両地域のユダヤ人の追放は，彼らがトランスニストリアに滞留せず，速やかにブク川東方へと移動することを前提として執行されたが，ドイツ側の拒絶によって前提が崩れ，立ち往生したユダヤ人から発生したチフスは，トランスニストリア全域で危機的様相を呈していた。アレクシアヌの要請もあり，チェルナウツィでは11月15日に追放執行が中止されたが，他方でアレクシアヌがトランスニストリア現地で，いわばもてあましたユダヤ人を処分するために執行したのがボクダノフカとドマネフカの虐殺であった。

トランスニストリアにおける全期間を通じ，ルーマニアのユダヤ人政策を特徴づけたのは無秩序である。しかし，無秩序は，一方ではユダヤ人の生命を奪ったが，他方では，それが生命の維持につながる場合もあったことを見ておきたい。ブコヴィナやベッサラビアの出発地で，あるいは追放の途上で，

あるいはトランスニストリア現地のゲットーやトランジット・キャンプで，軍人であれ，行政の当局者であれ，ルーマニア人にとってのユダヤ人は，第１に収奪の対象であった。死の行進を引率したルーマニア兵は，カネや貴金属や腕時計など，ユダヤ人が持ち出した金目のものを巻き上げて着服し，収奪価値を失ったユダヤ人を追放途上で射殺することもためらわなかった。しかし他方で，当局者の欲といい加減さがユダヤ人の生命を救った。モヒリウ・ポジリシキがその一例である。

1926年のモヒリウ・ポジリシキのユダヤ人口は9622人（総人口の41.8％）ほどだったが，独ソ戦開戦直後の人口は不明である。ソ連軍に徴兵されたユダヤ人や，東方へと逃走したユダヤ人がいる一方，ブコヴィナ，ベッサラビアからユダヤ人難民が流入したからである。また第Ⅳ章第２節で述べたように，1941年８月はじめにブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人追放が強行されたさい，モヒリウ・ポジリシキに渡ったユダヤ人の一部はもとの出発地に送還されず，街に残った。そのため，同年秋にトランスニストリアへの追放が本格的に開始されたとき，街のユダヤ人口は２万5000人にふくれあがっていたという[24]。

以後のモヒリウ・ポジリシキは，ブコヴィナ，ベッサラビアからブク川西岸のキャンプへと移動するユダヤ人の最も重要な通過点となるが，彼らの一部は街の行政当局に賄賂をおくり，モヒリウ・ポジリシキでの滞在許可証を手に入れることに成功した。たとえば南ブコヴィナのドロホイから移送された176家族は，1941年11月末，50万レイを差し出すことにより，滞在許可証を入手している[25]。あるいは，同じく南ブコヴィナのラダウチ出身の技術者であったユダヤ人は，街の発電設備と鋳物工場を再稼働させ，2～3000人のユダヤ人の雇用を生みだしたという[26]。1943年12月末，すなわちソ連軍によるモヒリウ・ポジリシキ解放の３ヶ月前，国際赤十字の調査隊がトランスニストリアに入ったとき，こうしてモヒリウ・ポジリシキでは１万1000人のユダヤ人が生き延びていた[27]。

またI･アントネスクは，旧王国領のユダヤ人から苛酷に軍税や特別税を取り立てたが，他方で，彼らが彼らのカネで行うユダヤ人救援活動を妨害しなかった。1941年１月，ジョイント（アメリカ・ユダヤ合同分配委員会の略称）

の財政支援で設立された独立組織，救援委員会は[28]，41年末，ルーマニア政府の公認をえて，トランスニストリアのユダヤ人に対し，カネや衣料品，日用品，薬等の送付を開始する。救援委員会の活動を支えたのは，ブカレストや旧王国領のユダヤ人の寄付と，戦争中を通じてルーマニアで活動を継続したジョイントであり，国際赤十字の援助金も救援委員会を介してトランスニストリアのユダヤ人のもとに届けられた。

先述したようにトランスニストリアのユダヤ人口は，オデッサを例外としてトランスニストリア中央より北部に多く片寄るが，ブコヴィナ，ベッサラビアからトランスニストリアに入ったユダヤ人の一部は，ブク川西岸のキャンプまで行かず，トランスニストリア北部に点在する現地のユダヤ人のゲットーに受け入れられた。(**地図 6** 参照。)不十分とはいえ，ブカレストから届くカネや救援物資は，こうしたゲットーのユダヤ人の生存を支える。

1939年当時で4271人(総人口の74%)のユダヤ人口を持つベルシャドは，41年 7 月29日にドイツ・ルーマニア同盟軍の手に落ちた。ベルシャドのユダヤ人の一部は撤退するソ連軍とともに逃走し，一部は同盟軍によって殺害された後，生き残った者はゲットーに集められた。1941年秋，ブコヴィナやベッサラビアからベルシャドに追放されたユダヤ人も合わせ，そこに 2 万人以上が詰め込まれることになる。前節で述べたように，1941年11月末あるいは12月はじめ，チェルナウツィからベルシャドのゲットーに到着した11歳の少女ルートが体験したのは，まさしくこの世の地獄だった。マイナス40度の寒さ，飢えと疫病の発生で次々に人が死んだが，真冬に町はずれの処理場まで大量の死体を運搬する手だてはなく，たとえ運んでも，凍りついた地面を掘って埋葬することはできなかった。そのため狭いゲットーの狭い部屋に生者と死者が同居し，身体を触れあうようにして眠った。ルートは，1942年 1 月末までに飢えと病気で父母と兄の全家族を失った[29]。この惨状を緩和したのが，やがてブカレストから届き始めたカネと救援物資である。ベルシャドのユダヤ人コミュニティは，これを用いてスープ・キッチンや診療所，孤児院等を開設し，ルートは孤児院に引き取られ，そこで生き延びた[30]。

ベルシャドでルートが生き延び，他方，ボグダノフカやドマネフカでユダヤ人虐殺が執行された時期は，独ソ戦の電撃的勝利に狂いの生じたナチ・ド

イツが，ユダヤ人政策をゲットー政策から絶滅政策へと転換した時期に重なる。ドイツは1942年１月のヴァンゼー会議をへて，ゲットーのユダヤ人の絶滅収容所への移送を本格化させた。ルーマニアにとってのトランスニストリアは，ドイツにとっての総督府に相当するが，ナチ・ドイツにおけるユダヤ人政策の転換は，ルーマニアの政策にいかなる影響をおよぼしたのだろうか。

ルーマニアにはもちろん，トランスニストリアに絶滅収容所を建設する力もなければ，その意思もなかった。1942年春，ブク川東方へのユダヤ人追放に見通しが立たない事態にかわりはなったが，ルーマニアは，ブコヴィナ，ベッサラビアに残るユダヤ人のトランスニストリアへの追放を再開する。それに先立ち，1942年３月27日，ルーマニア政府首脳部は，ベッサラビアとブコヴィナの行政府に対し，ユダヤ人を①追放ずみの者，②追放予定の者，③追放予定がない者の三者にわけ，それぞれについて最新の人数を報告するように要請した。

４月９日付けのブコヴィナからの回答によれば，すでに追放されたのは９万1845人であり，残留者２万3250人のほとんどはチェルナウツィにいた。そのうち１万7271人については追放の予定はなく，他方，もはや利用価値のない4031人については，今後，第１弾での追放を予定していた。残りについては，追放の可否を検討中であった[31]。同日，ベッサラビアからの回答では，すでに５万5867人が追放ずみであり，わずかに257人が都市部に残っていた[32]。しかし，ベッサラビアからの回答を受け取るより前に，すでに政府は３月30日付けでベッサラビアの行政府に対し，残留している最後のユダヤ人425人を列車でトランスニストリアに追放するようI･アントネスクの指示を伝えていた[33]。これに従い５月20日，キシナウから204人がゴルタ県のヴァルデイカに送られ，ついで７月10日に27人が出発した。これで，ベッサラビアのユダヤ人浄化は完了する[34]。一方，チェルナウツィでは，6月７日，14日，28日の３回にわけ，合計で4000人から5000人が追放された[35]。

ブコヴィナとベッサラビアで予定された民族浄化政策がほぼ終了した1942年７月，大ルーマニア領域に残るのは，南トランシルヴァニアと旧王国領のユダヤ人のみであった。残された文書史料は，少なくとも７月段階でのI･アントネスクが，彼らのトランスニストリアへの追放に関し，積極的な指示を

繰り返していたことを示している[36]。1942年の南トランシルヴァニアのユダヤ人口は3万9628人，旧王国領のユダヤ人口は，ワラキア11万4130人，モルドヴァ12万1131人で，合計33万5261人である[37]。これだけの人数のユダヤ人を一気に追放すれば，1941年秋の混乱が再現するだけであろう。そのため政府内では，当面，強制労働の忌避者や共産主義者あるいはその同調者と見なされた者など，9万5000人から10万人の追放が検討されたが[38]，しかし，依然としてブク川東岸への追放の道が開かれていない以上，これとて非現実的な数字であったはずだ。

ブカレストのドイツ公使マンフレート・フォン・キリンガーおよびドイツから派遣されたユダヤ人関係問題の顧問グスタフ・リヒターが，ルーマニアのユダヤ人のポーランドへの移送を要請し，移送プランが具体化するのは，まさしくこの時期，すなわちI・アントネスクが南トランシルヴァニアや旧王国領に残るユダヤ人の追放に手をつけ始めるかに見えたこの時期である[39]。I・アントネスクが，ルーマニアの経済活動にとって一時的には損失であろうと，ユダヤ人追放は執行されねばならないと繰り返し述べていたことを考えれば，トランスニストリアへのこれ以上の追放が実現困難であるいま，ドイツの要請を拒否する理由はないように思われる。

実際，キリンガーは7月22日付けでドイツ外務省に宛て，ルーマニアはユダヤ人のポーランド移送に同意している旨を伝えていた[40]。さらに，7月26日付けでドイツ保安警察ならびに親衛隊保安部第4課のハインリヒ・ミュラーからドイツ外務省に送られた文書[41]を見れば，ドイツ側は，ルーマニアのユダヤ人の移送が9月10日頃に開始されると予定していたことがわかる。この，きわめて具体的に記された予定日が，ルーマニアの了解がない，ドイツによるまったくの憶測であったとは考えにくい。リヒターが『ブカレスト日報』に「ルーマニアはユダヤ人から浄化される」というタイトルの論説を掲載するのは8月8日のことだ[42]。さらに，上述のミュラーの7月26日付けの文書には，さしあたり移送対象は労働可能なユダヤ人と記されているのに対し，8月11日付けで外務省のマルティン・ルターがブカレストのドイツ公使館に送った文書には，「これまでの交渉から，ルーマニア政府の側は，最大限広範囲のルーマニア・ユダヤ人が移送されるよう望んでいると考えてよ

い」と記されている[43]。同じく８月17日付けのルターの覚書には，すべてはI･アントネスクの意向に合致しており，移送は，まずアラド，ティミショアラ，トゥルダから開始されると記されていた[44]。

ところが，９月15日付けでキリンガーがドイツ外務省宛てに送った電報は，８月27日にルーマニア外務省に対し，移送の手順の詳細を問い合わせる口上書を送ったが，いまだにルーマニアは回答せず，したがって，移送開始日を決定することができないと伝える。キリンガーによれば，移送を開始するにあたり，ルーマニア側にもドイツ側にも，鉄道輸送等で技術的な問題が発生しているわけではなかった[45]。M･アントネスクが，ウクライナのヴィニツァにおかれたドイツ軍司令部でヒトラーと会見したのは，それからまもなく９月22/23日である。病気のI･アントネスクの代理として当地におもむいたM･アントネスクは，会見中，ヒトラーに対し，ユダヤ人のポーランド移送に対するルーマニアの同意に変わりがないことを伝えたという[46]。しかし，ドイツ外務省が９月29日付けでキリンガーに送った文書によれば，ベルリンでルーマニアのユダヤ人移送列車のタイムテーブルを決定するための会議がもたれたが，肝心のルーマニア代表は姿をあらわさなかった[47]。

ルーマニアの不可解な態度はドイツを当惑させた。10月11日，ドイツ外務省はキリンガーに対し，「ルーマニアのユダヤ人移送に関する状況報告のなかで述べられた諸事実は，すでに着手され，また旧ルーマニア領域[旧王国領]において引き続き必要な移送の諸措置が，予定された迅速さで執行されないか，もしくは新たな抵抗にあうのではないかとの懸念を抱かせるものである[48]」と述べ，折り返し，今後の見通しについて報告を求めている。こうしたドイツのいらだちをよそに２日後の10月13日，M・アントネスクが閣僚会議で宣言したのはトランスニストリアへのユダヤ人追放の当面の中止であり[49]，明言はされていないものの，その後のルーマニア政府の行動を見れば，これは，実質的にはポーランドへの移送の拒否宣言であった。そして，12月，キリンガーがルーマニア政府でユダヤ人問題を担当するラドゥ・レカから聞かされたのは，１人につき20万レイを支払うことを条件に，７万5000人から８万人のユダヤ人をパレスティナとシリアに出国させるというI･アントネスクの計画であった。出国先として，イランも視野に入っており，すでにI･ア

ントネスクはユダヤ・センターに対し，移住を組織するよう指示したというのである[50]。ドイツにとっては，寝耳に水の驚くべき方針転換であった。

Ⅵ　ルーマニアにホロコーストはなかった？

⑴　アントネスク政権崩壊

オーストリアを含むドイツ帝国で，1941年10月23日にユダヤ人の国外移住が全面的に禁止された後も，ドイツの同盟国ルーマニアの港は，ユダヤ人に対して閉じられてはいなかった。移住を試みるユダヤ人とそれを助けるシオニスト組織のメンバーは，老朽船を買い取るか，ブカレストの国営旅行社「ロマニア」を介して小型船をチャーターするなどし，出国許可証その他の必要書類を整え，多くの場合，ルーマニアの港コンスタンツァから，まずは中立国トルコのイスタンブールに向かった。トルコに着いたユダヤ人一行は，船長や乗組員がルーマニア人の場合，そこから先，彼らにかわる操縦者が確保できれば再び船でパレスティナに向かったが，そうでない場合は，パレスティナからトルコに派遣されたシオニスト組織のメンバーに助けられ，鉄道で陸路パレスティナに向かった[1]。いずれの場合もユダヤ人一行のほとんどは，イギリスの委任統治領であったパレスティナへの入植許可証を持たない非合法移民であり，トルコ政府もそれを承知でトルコ通過を黙認していたが，こうした渡航のすべてが成功したわけではない。なかでも最大の悲劇として知られるのが，1941年12月12日にコンスタンツァを出港したシュトゥルマ号の沈没である[2]。

ルーマニアで，ドイツの移住禁止措置後も細々と継続されたユダヤ人の脱出は，ルーマニアの国内問題であり，ドイツは口出ししなかった。しかし，それが，ルーマニア国家による７万から８万人規模のユダヤ人移住政策となれば，話は別である。1942年12月にこの政策を知らされたキリンガーは，同月12日付けでベルリンに報告を送り，いかに対処すべきか指示を仰ぐ。「[I・]アントネスクは，一方で，彼にとって何としてでも必要な160億レイを手に入れ，同時に，内政上，困難を引き起こすユダヤ人の大部分を快適なやり方で厄介払いしたがっている。」つまり彼は「一挙両得を狙っている」とい

うのが，キリンガーの見解であった[3)]。

ベルリンからキリンガーに送られた1943年１月９日付けの回答は，ルーマニアが本気なのかどうか信じがたいとしつつも，「ユダヤ人をパレスティナやシリアに移住させるという計画は，ドイツ政府が追及するヨーロッパのユダヤ人問題解決の基本指針において容認できない部分的解決であり，その実施はあらゆる手段を用いて阻止されねばならない[4)]」とする。さらに回答は，パレスティナのアラブ人がユダヤ人口の増加に危機感を抱き，両者のあいだに暴力的衝突が発生している現状でユダヤ人の大量移住を認めれば，目下のドイツとアラブ諸国の良好な関係を損なうとし，さらに，パレスティナに渡ったユダヤ人が連合国側の戦力として使われる可能性も排除できないと指摘する。

ルーマニアのユダヤ人のポーランド移送に関して，ドイツに合意したかに見える1942年８月はじめから同年末の方針転換にいたるまで，I･アントネスクが何を考えていたのか，史料的には謎である[5)]。

キリンガーは1943年３月26日付けでドイツ外務省に宛てた文書に，ルーマニア政府による覚書，すなわち「ルーマニアにおけるユダヤ人問題解決のためルーマニア国家によって行われた諸措置に関する覚書」を添付している。それを見ると，この件に関してルーマニアからドイツに行われた説明は，ルーマニアは全土からユダヤ人を一掃するという政策を放棄したわけではなく，その一掃の方法として，このたび移住政策が採用されたという，ほとんど一語につきた。覚書は，1938年以降のルーマニアの反ユダヤ政策を年次順に説明しつつ，政策の効果を説き，最後を次のように締めくくっている。

> 「ユダヤ人の移住は,国家にとってきわめて有益であるだろう。というのも第１に,国家を内部から破壊する者どもが取り除かれるからであり，第２に，数十億レイとも見込まれる移住手数料によって国家にかなりの収入がもたらされるだろうからである[6)]。」

覚書によれば，今後の移住政策の対象となるのは，ハンガリーに割譲された北トランシルヴァニアを含まず，現在の大ルーマニア領域に残っているユダヤ人約30万人であった。

苛酷な反ユダヤ政策の執行においても，ソ連との戦闘においても，ルーマニアはドイツに最も忠実な同盟国であった。1943年２月のスターリングラードにおけるドイツ軍の決定的な敗北の後でさえ，キリンガーは，同年３月31日付けの外務大臣宛ての私信で，ルーマニアが独ソ戦から離脱することは100パーセントありえないとしている。ではなぜルーマニアは，ドイツによるユダヤ人のポーランド移送要請を無視したのか。これについてキリンガーは，ソ連を別にすれば，ルーマニアにとってイギリスやアメリカとの戦いは，いわばどうでもよいものだとする。ルーマニアが，移送というユダヤ人問題のラディカルな解決に躊躇するのは，「たとえば人道的見地や，経済的諸理由によるのではなく，フリーメーソンとユダヤの支配下にある西側民主国の反発を買わないようにするためだ[7]」というのが，キリンガーの勘ぐりであった。しかし，1942年８月から同年末にいたる時期に，ルーマニアが一方ではソ連との戦線を維持しつつ，他方でユダヤ人の絶滅収容所への移送を取引材料とし，イギリスやアメリカとの宥和を真剣に模索したことを示す文書史料は残されていない。

むしろルーマニアの変心理由のひとつとしてアンチェルが指摘するのは，独ソ戦においてキリンガーも評価したドイツに対するルーマニアの模範的忠実さが正当に報われていないことに対する不満，とりわけ北トランシルヴァニアが返還されないことに発する不満である[8]。1940年にドイツの圧力のもとでハンガリーに割譲された北トランシルヴァニアでは，ルーマニア人が抑圧され，難民化して南トランシルヴァニアに流れ込んでいた。ルーマニアは独ソ戦に協力し，多大な犠牲者を出しているにもかかわらず，北トランシルヴァニア返還問題でヒトラーは動かなかった。このたびのポーランドへのユダヤ人移送要請においても，ルーマニアが自国にとってなお一定の経済的価値を持つユダヤ人を手放し，ナチの反ユダヤ的世界観に従うことに対する報償として，期待した北トランシルヴァニアの返還が約束されたわけではなかった。I・アントネスクは，ハンガリーやイタリアは，ルーマニアに比べてはるかに手ぬるい反ユダヤ政策しか執行していないと非難し，ドイツがこれを問題にしないことに対して繰り返し不満を述べている[9]。さらに，こうした不満に加え，ユダヤ人の移送要請におけるリヒターらの居丈高な態度に対

し，主権国家の長としての反発もあったとされる[10]。

もっとも移住政策の採用といっても，ルーマニアにとっての関心は，ユダヤ人が支払う出国税や，出国手続きに関連して徴収される手数料収入がすべてであった。移住にかかる費用の調達をはじめとして，移住船の確保からトルコへの入港，トルコから先への移動が成功するかどうかは，すべてユダヤ人側の自助努力にかかっていた。ユダヤ機関がチャーターした船２隻と，ルーマニアで活動する国際赤十字がチャーターした船１隻が合計約1000人のユダヤ人を乗せ，ルーマニアの港を出港したのは，ようやく1944年３月から５月になってからである[11]。さらに８月，３隻が合計約1000人を乗せて出港するが，うち１隻は黒海で爆沈された[12]。1945年にユダヤ機関が作成したリストによれば，1944年にルーマニアからトルコ経由でパレスティナに入ることに成功したユダヤ人は4433人でしかなかった[13]。

人数はさておき，ユダヤ人のパレスティナ移住がドイツの意に反して行われたことにかわりはなく，ドイツは最後までこれを容認しなかった。しかし，ドイツ側には心変わりに見えようと，I･アントネスクは，みずからのルーマニア民族浄化政策において一貫していたといってよい。すなわち，出ていくユダヤ人は追わず，追放したユダヤ人には戻ることを認めないということだ。キリンガーのいう「人道的見地」についていえば，I･アントネスクは，1944年２月４日付けで旧知のユダヤ人建築家クレジャンに宛てた私信で，「ヨーロッパ的な考え方を身につけた１人の人間として，私は，いかなる者に対しても殺人行為を許容せず，実行することもできません。ユダヤ人に対してもまた，そのような殺人行為が犯されないよう，私は措置をとってきましたし，これからもそうするでしょう[14]」と書く。確かにポーランドへの移送の拒否は，ルーマニアのユダヤ人を絶滅収容所での死から救ったし，I･アントネスクが絶滅収容所での大量虐殺に嫌悪感を抱いたことも事実かもしれない。しかし，I･アントネスクは，ガス室なき巨大な収容所と化したトランスニストリアで，ルーマニアのユダヤ人が緩慢に衰弱死していくことに対し，何の意も払わなかった。現にI･アントネスクは，トランスニストリアに追放されたユダヤ人の許可なき帰還を厳禁する。

ただし例外は，ドロホイのユダヤ人と孤児である。I･アントネスクが繰り

返し述べたように，ルーマニアの民族浄化政策において，まずブコヴィナとベッサラビアのユダヤ人が標的とされたのは，1940年にソ連が両地域を占領したさい，彼らがソ連によるルーマニア人住民の迫害に加担したためとされた[15]。それゆえ，1931年から41年末までルーマニアのユダヤ人コミュニティ連合の会長職にあったヴィルヘルム・フィルダーマンが，41年10月，再三にわたり，ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の追放中止を要請したのに対し，I・アントネスクはこれを拒否したが[16]，他方で旧王国領のユダヤ人は別扱いとすることを約束した[17]。実際には，この約束は当面のことであり，I・アントネスクが地域を区別せず，大ルーマニア領域全体の民族浄化をめざしていたことは，すでに本稿で述べたとおりである。ところが，旧王国領のユダヤ人のポーランド移送を拒否して移住政策を明言した後，I・アントネスクはフィルダーマンとの約束に立ち返り，1941年11月に旧王国領に属するドロホイのユダヤ人がトランスニストリアに追放されたのは「手違い」であったとした。したがって，ドロホイのユダヤ人約7000には，もとの居住地への帰還を認めてもよいというのだ[18]。加えて，トランスニストリアにいる4500人の孤児の帰還も認められた[19]。

I・アントネスクがユダヤ人の国外移住政策を打ち出した後，戦争中を通じてルーマニアの地下で活動を継続していたシオニストは，ただちにユダヤ人孤児のパレスティナ送り出し工作を開始していた[20]。I・アントネスクら政府首脳部はシオニストの工作を承知しており，上記の孤児の帰還了承は，子供たちの国外移住を前提とした措置であったと推測される。実際，トランスニストリアの孤児の帰還は，遅くとも1943年の３月には動きだし[21]，1944年３月までに15歳未満の孤児1974人がルーマニアに戻され，次いで同年３月６日に，同じく15歳未満の孤児1846人がルーマニアに到着した[22]。ベルシャドで孤児になったルートがヤシに到着したのは，おそらく1943年末である[23]。ルーマニアに戻された孤児の一部は，上述の1944年４月から５月にかけて出港した移民船でパレスティナ向かった。他方，ドロホイのユダヤ人について，I・アントネスクは1943年12月８日に帰還を指示し，これによって12月のうちに約7500人のモルドヴァへの帰還が実現した[24]。

移住政策がなおI・アントネスクの民族浄化政策の一環であったとすれば，

それが根本的に放棄されるのは，1944年３月13日，ついにソ連軍がブク川を越え，トランスニストリアに入った後である[25]。この時点でI・アントネスクは，ルーマニア行政府のトランスニストリアからの撤退と，トランスニストリアに移送されたユダヤ人をブコヴィナ，ベッサラビアに戻すことを決定するが，時はすでに遅すぎた。撤退するドイツ軍と進撃するソ連軍でトランスニストリアが大混乱に陥るなか，ユダヤ人がどうしたか，一部が自力で帰還をはたしたと推定される以外，彼らの運命は不明である[26]。

1944年８月はじめ，すでにブコヴィナ全域とキシナウ以北のベッサラビアはソ連軍の支配下にあり，８月20日に始まるソ連軍のヤシ・キシナウ作戦で，３日後にはヤシも陥落する。最終段階までブコヴィナとベッサラビアの確保にこだわったI・アントネスクの命運はつきた。８月22日，I・アントネスクはソ連との休戦を決意して国王に謁見を申し入れ，23日に王宮に入ったが，国王は御前に出たイオンとミハイの両アントネスクに解任を申し渡し，身柄を拘束させる。同日，夜10時，国王はラジオを通して声明を発表し，独裁政権の崩壊と国民統合政府の樹立，連合国に対する戦争の終結と，ブコヴィナ，ベッサラビアの放棄を含め，連合国によって提示された停戦条件の受諾を告げた。

⑵　ルーマニアのホロコースト認識の問題点

独ソ戦のあいだルーマニアの管轄下にあった地域で，いったいどれだけの数のユダヤ人が殺害されたのか。ここでの「殺害」とは，銃殺や死にいたる暴行，虐待その他による殺害のほか，肉体的消耗や食糧の欠乏に起因する衰弱死や，チフス等の病気による死亡を含んでいる。その上でユダヤ人の大量殺害は，ブコヴィナやベッサラビアで執行された殺害と，トランスニストリアでの殺害，すなわちブコヴィナ，ベッサラビアからトランスニストリアへ追放された少なくとも15万5000人以上のユダヤ人と，ドイツ・ルーマニア同盟軍が攻め込んだ時点でトランスニストリアに残っていた15万あるいは20万人とも推定されるウクライナ・ユダヤ人に対して執行された殺害に大別される。

いずれについても残された記録が乏しく，研究者の推定値は大きく異なっている。最も控えめな推定を行っているヨアニドによれば，ブコヴィナ，ベッ

サラビアで殺害されたユダヤ人は4万5000人以上あるいは6万人近くであり，トランスニストリアでの死亡者は，追放されたユダヤ人の約半数にあたる7万5000人と現地のウクライナ・ユダヤ人が少なくとも13万人で，すべてを合わせ，少なくとも25万人が殺害された[26]。これに対してアンチェルは，ブコヴィナ，ベッサラビアでの死者は10万人，トランスニストリアでの死者は，追放されたユダヤ人が14万人，ウクライナ・ユダヤ人が18万人であったとしているが[27]，ほとんどの研究者の推定値は，両者のあいだに入るといってよいだろう[28]。

では，これだけの数のユダヤ人の死は，ルーマニアの人々にどのように認識されたのだろうか。

比較のためにいえば，第二次世界大戦勃発直前に37万5000人のユダヤ人口(総人口の29.1%)を擁したポーランドの首都ワルシャワでは，市内に設置されたゲットーの存在を知らぬ市民はおらず，1943年4月の蜂起で燃え上がったゲットーの黒煙は市の上空を覆い，人肉の焼ける臭いは市中に漂ったという。そして戦争が終了したとき，かつてのワルシャワのユダヤ人口はほぼ消滅していた。あるいはリトアニアのヴィリニュスやラトヴィアのリーガでも，ユダヤ人は市内のゲットーに隔離された。ヴィリニュスでは，独ソ戦開戦当時5万7000人程度であったと推定されるユダヤ人口が，戦後はほぼ消滅し，リーガのユダヤ人4万3672人(1935年当時)の運命も同様である。ヴィリニュスでユダヤ人の大量射殺が執行されたのは，ポーランド語称でポナリの森(リトアニア語称パナレイ)であり，リーガではルンブラの森であったが，いずれも人里離れた郊外とはいえ，そこでの出来事は噂として市民に伝わっていた。これら首都の状況にあらわれているとおり，ポーランドでもリトアニア，ラトヴィアでも，戦争のあいだにユダヤ人口はほとんど消滅する。戦争終了直後のポーランド人やリトアニア人，ラトヴィア人は，いやでもホロコーストをかつて隣にいたユダヤ人の不在として認識せざるをえなかった。

これらの国でホロコーストの記憶が急速に曖昧になり，現地住民のコラボ問題をうやむやにしていったのは，戦後，ソ連に組み入れられたリトアニア，ラトヴィアについていえば，とりわけスターリン時代に人々が体験した死んだユダヤ人のことを考えるどころではない恐怖政治と，ソ連の公式の歴史学

および歴史教育におけるナチ・ドイツの犠牲者の匿名化によるところが大きい。ソ連では，2600万から2700万人もの犠牲者を出したドイツとの大祖国戦争において，特定の民族の犠牲のみを「特権的に」語ることは許されなかった[29]。

では，ルーマニアはどうか。戦後のルーマニア国民のあいだに，ポーランドやリトアニア，ラトヴィアと同様のルーマニアのホロコーストという認識は成立したのだろうか。

ブカレストにゲットーは設置されず，ポナリの森もルンブラの森もない。確かに人々は，1940年９月の国民軍団国家設立後に激化し，I･アントネスクの単独政権に引き継がれたルーマニアの反ユダヤ政策を知らないはずはなく，41年１月のブカレストで，軍団蜂起のさいに発生したユダヤ人虐殺[30]や，６月末のヤシでのポグロムと死の列車も，一般市民に隠された事実ではなかった。

しかし，戦後，北ブコヴィナとベッサラビアが最終的にソ連領となり，現在のルーマニアの国境が確定したとき（**地図７**参照），再びルーマニア領となった北トランシルヴァニアのユダヤ人がハンガリー支配下でアウシュヴィッツに移送され，犠牲になったのを除けば，ルーマニア国境内のユダヤ人口は，ホロコーストによる打撃を被ってはいない。戦後ルーマニアのユダヤ人口は，消滅どころか，アントネスク政権崩壊から戦後の混乱期に周辺地域からユダヤ人が流入し，1947年には42万8312人[31]と，ポーランドのユダヤ人口が消滅した後のヨーロッパで最大規模であった。他方でブコヴィナ，ベッサラビアのホロコーストは，戦後のルーマニア国民にとっては，ルーマニアのホロコーストではなく，外国のホロコーストになっていた。

戦後ルーマニアにおけるユダヤ人口の消滅は，ホロコーストではなく，パレスティナへの移住の結果である。1944年からしばらくルーマニアは，パレスティナをめざすユダヤ人の非合法渡航の主要な出発地となった。1948年のイスラエル建国後は，ルーマニアからの移住は一時期の中断を例外として継続され，1948年から89年までの移住者は約28万人に達した[32]。こうした流出と人口構成の高齢化により，1948年から94年までルーマニアの主席ラビであったモーゼス・ローゼンによれば，1987年，すなわちチャウシェスク政権

末期のルーマニアで確認されたユダヤ人口は約２万2000人にまで減少した[33]。アントネスク政権がめざしたルーマニアのユダヤ人浄化は，実に，ここにいたってほぼ実現されたかたちになったのである。

以上を見れば，戦後ルーマニア国民のあいだで，ルーマニアのホロコーストという認識の成立がなかなか困難であったことがわかる。

本稿で詳述したように，アントネスク政権は「自国」である大ルーマニア領域からユダヤ人を一掃するため，まずブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人浄化から開始した。しかし，戦後ルーマニアの歴史教科書では，小学校から大学にいたるまで，国民軍団国家やアントネスク政権下での共産主義者の弾圧が強調される一方，ユダヤ人迫害の記述はごくわずかであり，取り上げられるとしても，先に述べたように現在の「自国」の人々が見聞したこと，すなわち1941年の軍団蜂起のさいのブカレストでのユダヤ人虐殺や，ヤシのポグロム，あるいは旧王国領でユダヤ人に強いられた強制労働等に限られる[34]。

ホロコースト研究者のあいだでルーマニアは，ホロコースト否認国として悪名高い。そのさい引き合いに出されるのが，1978年の歴史家ニコラエ・ミネイの次の一文である。

> 「ルーマニアではホロコーストは起こらなかった。その理由はそもそも，鍵十字を身につけた［ホロコースト］執行者たちが，―― 少数の，どちらかといえば取るに足りない例外を除けば ―― 現地で自発的な協力を得られなかったばかりか，彼らが ―― 公に，あるいは他のやり方で ―― 移送あるいはその他の大量虐殺の組織化において共犯者を募ろうとしたとき，あからさまな拒否に出会ったことによる。［中略］　ナチ占領下にあったすべての国のなかでルーマニアは，ゲットーも絶滅収容所も持たなかった唯一の国として，ユダヤ人をアウシュヴィッツやマイダネクの火葬炉に移送しなかった唯一の国として，外国のユダヤ人に避難所を提供した唯一の国として，きわだっている[35]。」

ミネイが，ルーマニアはナチ占領下にあったというのは明らかに誤りである。しかし，ミネイの一文は，戦後ルーマニアの一般国民の実感とそれほどかけ離れてはいまい。

もちろん戦後ルーマニアの専門歴史研究は，ミネイの否認論で代表されるほど単純ではない。1946年から47年にブカレストで出版されたカルプのホロコースト史料集『黒書』[36]は，48年の共産党政権の確立と同時に人々の目から

消え，図書館の奥深くに隠されてしまったが，デジ政権がソ連と袂をわかち，民族共産主義への道を模索しはじめる1960年代なかば以降，一次史料に依拠してルーマニアにおけるユダヤ人迫害や，ブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人のトランスニストリアへの追放を記述した見るべき価値のある歴史研究も存在した。

ルーマニアにかぎらず，共産党のイデオロギー政策に強く規定され，微妙に変化する旧社会主義国の歴史研究の動向を跡づけるのは容易ではないが，デジに続くチャウシェスク時代，ルーマニアの民族共産主義は，国内的には，ソ連と戦ったI・アントネスクの部分的復権，ユダヤ人迫害におけるナチ・ドイツの責任の強調とルーマニアの責任の否認に結びつき，先に引用したミネイの一文を生み出す。しかし，国際的にはルーマニアは，その自主外交においてイスラエルと外交関係を維持した，ヨーロッパの旧社会主義諸国のなかでは例外的な国家であった。1980年代にはルーマニアの歴史研究者は，イスラエルのホロコースト記念館ヤド・ヴァシェムが主催する国際ホロコースト会議にも出席している。そうした場では，ブコヴィナ，ベッサラビア，トランスニストリアで起こった出来事は歴史的事実として否認のしようもなかったが，ルーマニアの研究者によって主張されたのは，ブコヴィナ，ベッサラビアはルーマニア固有の領土だが，そこにいるユダヤ人はルーマニア・ユダヤ人ではなく，したがって，ナチ・ドイツによる彼らの殺害はルーマニアのホロコーストではないという，まことに奇妙なものであった[37]。

1989年末の体制転換後，2007年１月にルーマニアはヨーロッパ連合に加盟する。東中欧の旧社会主義国はどこでも，ヨーロッパ連合への加盟に先立ち，ホロコーストに関して自国の歴史認識のあり方を明確にすることを迫られた。ルーマニアでも2003年，ルーマニアにおける反ユダヤ主義の歴史ならびにルーマニアとホロコーストのかかわりの全貌を明らかにするため，国際歴史委員会が設置された。委員長を務めたのは，北トランシルヴァニアのシゲト生まれのユダヤ人で，1986年にノーベル平和賞を受賞した作家エリ・ヴィーゼルである。国際歴史委員会は2004年に最終報告書を公表し[38]，そこではブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人の殺害が，ルーマニア国家の意思により，ルーマニア国家の民族浄化として，ルーマニア国家の手により執行されたこ

とが立証されている。

だが，こうした歴史研究の成果は，現在のルーマニアにおいて，ルーマニア人がみずからの国民同胞であるべきユダヤ人を殺害したという認識を促進するだろうか。

ここで問題を複雑化しているのは，ホロコースト期のブコヴィナやベッサラビアのユダヤ人が，必ずしもルーマニア・ユダヤ人のアイデンティティをもってはいなかったことである。長く続いたオーストリア帝国領時代のブコヴィナで，ユダヤ人の多くはドイツ語とイディッシュ語の使用者であった。第一次世界大戦後にブコヴィナがルーマニア領になると，本稿で引用した1930年生まれのルートも，あるいは1920年にチェルナウツィで生まれた詩人で，日本でも名を知られるパウル・ツェラーン(本名パウル・アンチェル)も，学校教育はルーマニア語で受けたが，家庭で話されたのはドイツ語である。ブコヴィナのユダヤ人にとって彼らの法的平等が保障されていたオーストリア時代は，軍団が勢力を伸張した両大戦間期のルーマニア時代に比べれば黄金の安定時代でもあった。ロシア帝国領時代の長いベッサラビアについていえば，ユダヤ人の多くはイディッシュ語とロシア語の使用者である。1903年のキシニョフ(キシナウ)のポグロムが示すように，ベッサラビアのユダヤ人にとってロシア帝国は決して優しい母ではなかったが，1918年に新たな母になったルーマニアが，ロシアに比べてはるかにましというわけでもなかった。

結局，現在のルーマニアの人々にとって，ブコヴィナ，ベッサラビアのホロコーストは，外国で外国のユダヤ人に起こった災難であり，そこでルーマニア人が行ったあらゆる蛮行も，どこか他人事のように認識されているのかもしれない。2013年夏にブカレストを訪問したさい，ホロコースト記念碑(**写真6**参照)の場所がわからず，間近なところまでたどりつきながら，右に行けばよいのか，左に行けばよいのか，迷った。道行く何人もの人に記念碑はどこかと尋ねても，怪訝な顔と知らないという応えが返ってきた。ようやく見つけた記念碑がどこか場違いなものに見えたのは，通行人の反応が私のなかに作り出した印象のせいだろうか。

注

第Ⅳ章

12）Jean Ancel, *Documents concerning the Fate of Romanian Jewry during the Holocaust,* 12 Vols. New York 1986.

13）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 235. 情報の欠如については，1941年８月１日付けの首相府から内務省への問い合わせと８月４日付けの内務省の回答を参照。Ancel, *Transnistria,* Vol. 2, Document 12, 13, pp. 22-23.

14）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* pp. 234-235.

15）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 24, p. 216.

16）VEJ, Bd. 7, Dokument 290, S. 768-770.

17）Ancel, *Transnistria,* Vol. 2, Document 10, p. 19.

18）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 25, p. 219.

19）VEJ, Bd. 7, Dokument 290, S. 769.

20）VEJ, Bd. 7, Dokument 293, S. 773-775.

21）VEJ, Bd. 7, Dokument 294, S. 776. ドニエストル川東岸への追放後，ドイツ軍によってブコヴィナに送還されたユダヤ人の存在については，本章第１節で述べた８月17日付けのブコヴィナ県とチェルナウツィ市それぞれの警察長官の連名による報告書にも記されている。VEJ, Bd. 7, Dokument 292, S. 771.

22）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 39, p. 264. Cf. *Final Report*, pp. 63-66.ドイツ外務省の対応を見れば，ユダヤ人追放の開始時期や方法にまで立ち入った了解が成立していたかどうか，疑問である。

23）ベッサラビア北部に位置するエディネツは，東中欧に見られた典型的なユダヤ人町のひとつで，1930年当時でユダヤ人4341人が町の人口の90%以上を占めた。1941年７月はじめ，町がドイツ・ルーマニア同盟軍の手に落ちる前，ユダヤ人の一部は逃走に成功した。同盟軍占領後，町に残っていたユダヤ人の一部は殺害され，一部はトランスニストリアへの追放のため，ドニエストル川沿いの町レジナやセクレニ方面に連行される。エディネツのトランジット・キャンプは，こうして現地のユダヤ人の姿が消えた後，町の一角を鉄条網で囲って設置された。おもに北ブコヴィナから連行されたユダヤ人など１万2000人が詰め込まれ，狭くて不衛生な環境，水と食糧の欠乏に苦しめられた。エディネツの収容者のトランスニストリアへの追放は，1941年10月10日から18日にかけて執行された。同様のキャンプが，セクレニ，マルクレシュティ等にも設置された。Cf. Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* pp. 253-257.

24）Ancel, ibid., pp. 245-246. ８月27日付けのルーマニア警察本部の報告によれば，ドイツ軍は，ユダヤ人１万2600人を２グループにわけてベッサラビアに送り返し，これらユダヤ人はヴェルトゥジェニのキャンプに収容された。ibid., pp. 606-607, Note 13.

25）ibid., p. 246.

26) ibid., p. 536, Table 13.
27) *Final Report,* p. 137.
28) ibid.

第Ⅴ章

1) *Final Report*, p. 144.
2) 特別行動隊Dの報告書によれば，1941年6月22日から9月20日までのあいだ，彼らによって1万7315人が殺害された。*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* p. 31, Note 4.
3) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 625, Note 3.
4) VEJ, Bd. 7, Dokument 299, S. 783.
5) VEJ, Bd. 7, Dokument 300, S. 783-784.
6) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* p. 33.
7) ibid. Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 356. VEJ, Bd. 7, S. 784, Anm. 6. ドイツの諜報機関が11月14日付けで作成した報告書(VEJ, Bd. 7, Dokument 304, S. 790)は，ルーマニア諜報機関との連絡将校として現地にいた者から得た情報として，10月23日の朝，オデッサ港湾施設内の板囲いをされた場所で1万9000人のユダヤ人が射殺され，死体はガソリンをかけて焼かれたとし，さらに翌24日，4万人のユダヤ人がオデッサからダルニッチに連行され，射殺されたと記している。オデッサの虐殺を語る貴重な同時代史料ながら，ダルニッチの虐殺に関して事実関係が混乱している可能性がある。なお，ダルニッチでの虐殺を免れたユダヤ人はオデッサに戻された。Vgl. VEJ, Bd. 7, Dokument 301, S. 784 und Anm. 3.
8) *Final Report,* p. 139.
9) VEJ, Bd. 7, Dokument 297, S. 780.
10) VEJ, Bd. 7, Dokument 298, S. 781-782.
11) ユダヤ人に対する大量虐殺の執行は，軍事行動(die militärische Aktion)等と同じく，ナチ用語でアクションと呼ばれた。キシナウでは，記録で確認できるだけでも8月1日，7日，8日に大規模なアクションが執行され，1200人以上が殺害された。Cf. *Encyclopaedia Judaica,* 2 nd ed., Vol. 12, p. 199.
12) Ruth Glasberg-Gold, *Keine Zeit für Tränen. Mein Überleben der rumänischen Shoah,* Wien 2009, S. 47-59. マルクレシュティのキャンプについては，第Ⅳ章の注23)を見よ。
13) Vgl. VEJ, Bd. 7, Dokument 303, S. 787.
14) VEJ, Bd. 7, Dokument 302, S.786. Ancel, *Transnistria,* Vol. 2, Document 129, p. 252. アレクシアヌの追放中止要請は11月11日付けでベッサラビアとブコヴィナの行政責任者に送られ，チェルナウツィでは11月15日に追放が中断された。
15) Ancel, *Transnistria,* Vol. 3, Document 592, pp. 1134-1135, Document 594, pp. 1138-1139.
16) ibid., Vol. 2, Document 165, pp. 316-317.

17）VEJ, Bd. 7, Dokument 307, S. 793.

18）Ancel, *Transnistria,* Vol. 1, p. 116.

19）VEJ, Bd. 7, Dokument 307, S. 793, Anm. 8.

20）VEJ, Bd. 7, Dokument 310, S. 795-797.

21）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* pp. 34-35. ボグダノフカの虐殺については，戦後の戦犯裁判での証言以外に記録が残っていない。大量虐殺終了後，イソペスクの指令により，１月から２月の２ヶ月をかけ，死体の焼却が行われた。焼却作業に使われたのもユダヤ人である。

22）ibid., p. 36. トランスニストリアでのユダヤ人の移動や大量虐殺の執行にあたり，ルーマニアの当局にとって，現地の地理や事情に通じたウクライナ人の協力は不可欠だった。また，トランスニストリアのガス室なきホロコーストにおいて，ナチ用語でいう民族ドイツ人の関与も見逃すことはできない。ゴルタ県の南に位置するベレゾフカ県では，人口の約20％がドイツ系であった。(Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 379.) これら民族ドイツ人によって組織された自警隊は，この地域にいたユダヤ人と，主にオデッサ方面からこの地域のゲットーに送り込まれたユダヤ人の殺害に深くかかわり，1942年４月末のベレゾフカ憲兵隊の月例報告によれば，この地域にいたユダヤ人の85％は民族ドイツ人によって殺害された。Vgl. VEJ, Bd. 7, Dokument 320 und 321, S. 811-812.

23）Cf. Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* pp. 457-469.

24）Israel Gutman (Editor in Chief) , *Encyclopedia of the Holocaust*, New York/London 1990, Vol. 3, p. 985.

25）VEJ, Bd. 7, Dokument 317, S. 808-809.

26）*Encyclopedia of the Holocaust,* Vol. 3, p. 986.

27）VEJ, Bd. 7, Dokument 329, S. 828.

28）戦前よりルーマニアには，ルーマニアのユダヤ人コミュニティを代表する組織としてユダヤ人コミュニティ連合があり，1941年12月16日に連合が解体された後，それに代わる機関としてユダヤ・センターが設立された。ユダヤ・センターは，政府でユダヤ人問題を担当するラドゥ・レカの監督下におかれ，ルーマニアのユダヤ人の立場を代表すると同時に，強制労働の提供やユダヤ人に対する特別税の徴収など，政府の命令の執行機関でもあり，ナチ・ドイツがゲットーその他に設置したユダヤ評議会(Judenrat)と類似する。これに対して救援委員会は，組織的にはユダヤ人コミュニティ連合からも，ユダヤ・センターからも独立しており，正式名称はComisia Autonomă de Ajutorareである。設立後の救援委員会の最初の仕事は，第Ⅲ章の注３)で述べた1941年１月の軍団によるポグロム犠牲者の救援であり，ついで，第Ⅲ章第２節で述べた41年６月末のヤシのポグロム犠牲者の救援であった。

29）Glasberg-Gold, a.a.O., S. 60-79. Vgl. auch VEJ, Bd. 7, Dokument 327, S. 825.

30）1943年12月末，国際赤十字の調査隊がトランスニストリアに入ったとき，同地域に

はユダヤ人約7万5000人がおり，そのうち約4万5000人がモヒリウ県にいた。都市別では，本文で述べたようにモヒリウ・ポジリシキに1万1000人がおり，これに次ぐのがベルシャドの約8000人であった。(VEJ, Bd. 7, Dokument 329, S. 828.)トランスニストリアのユダヤ人の生存率は北部が高い。

31) Ancel, *Transnistria,* Vol. 3, Document 592, pp. 1134-1135.
32) ibid., Vol. 3, Document 594, pp. 1138-1139.
33) ibid., Vol. 3, Document 562, p. 1048.
34) ibid., Vol. 3, Document 915, p. 1687.
35) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 467. チェルナウツィ生まれのユダヤ人で，ドイツ語詩人パウル・ツェラーンの両親は，このときの移送の犠牲者である。詳しくは，イスラエル・ハルフェン『パウル・ツェラーン[若き日の伝記]』(相原勝，北彰訳，未来社，1996年)の180ページ以下を見よ。
36) ibid., pp. 470-485.
37) ibid., p. 536, Table 13.
38) ibid., p. 471.
39) ドイツによるルーマニアのユダヤ人の移送要請は，ワルシャワ・ゲットーからトレブリンカ絶滅収容所への移送が始まる時期と重なる。
40) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 478 and p. 639, Note 26.
41) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 93, p. 456.
42) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 479.
43) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 97, p. 464.
44) ibid., Document 100, p. 469.
45) ibid., Document 110, p. 522.
46) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 482.
47) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 112, p. 527.
48) ibid., Document 116, p. 557.
49) Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 486.
50) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 120, p. 567. ユダヤ・センターについては，本章の注28)を見よ。

第Ⅵ章

1) *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 123, pp. 575-579. ルーマニア人の乗組員はイギリスの委任統治領パレスティナでは敵国人扱いとなり，拘束される危険があった。
2) パレスティナへの非合法渡航を助けるシオニストが調達した老朽船シュトゥルマ号は，1941年12月12日，約770人のユダヤ人を乗せ，コンスタンツァを出港した。便宜的にパナマ国旗を掲げ，直接パレスティナをめざしたが，エンジン故障のため，

16日，イスタンブールに入港する。船長はブルガリア人だった。ユダヤ人は全員，パレスティナの委任統治国であるイギリスの入植許可証を持っていなかったため，彼らの扱いをめぐり10週間にわたってイギリス，トルコとエルサレムのユダヤ機関が協議するが，結論に達せず，トルコは行き先の決まらぬユダヤ人の上陸を許可しなかった。その間，船内の衛生環境は劣悪化し，赤痢が発生する。問題をもてあましたトルコは，行き先問題が解決しないまま，さらにはエンジンの故障も修理不能なまま，1942年２月23日，シュトゥルマ号を公海上へと曳航，翌24日，船はソ連の潜水艦の魚雷を受けて沈没した。生存者はただ１人であった。シュトゥルマ号に乗船したユダヤ人の多くは，トランスニストリアへの移送を免れたブコヴィナ，ベッサラビアのユダヤ人であったとされる。

3）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 120, p. 567.

4）ibid., Document 122, p. 572.

5）７月なかばからI・アントネスクは病気で，精神的にも抑鬱状態にあったという。アンチェルによれば，8月はじめから10月21日までI・アントネスクが署名した文書は見つかっていない。Cf. Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 659, Note 38.

6）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 140, p. 623.

7）ibid., Document 143, p. 640.

8）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* pp. 487-488.

9）Cf. *The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 124, p. 585.

10）ibid., p. 42.

11）ibid., Document 181, p. 740, Document 184, p. 752. Corry Guttstadt, *Türkei, die Juden und der Holocaust,* Berlin/Hamburg 2008, S. 255.

12）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* p. 46. ソ連の潜水艦によるものか，ドイツの潜水艦によるものか，いまだ不明である。

13）Guttstadt, a.a.O., S. 256.

14）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 178, p. 731.

15）Cf. *Final Report,* p. 211.

16）ibid. フィルダーマンはI・アントネスクの学友の１人であった。ルーマニアのユダヤ人コミュニティ連合については，第Ⅴ章の注28)を見よ。

17）Ancel, *The History of the Holocaust in Romania,* p. 299.

18）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* Document 178, p. 731.

19）ibid.

20）Cf. ibid., Document 132, 147, 149, 151, 152.

21）Glasberg-Gold, a.a.O., S. 103f.

22）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* p. 48 and Note 6.

23）Glasberg-Gold, a.a.O., S. 106 und S. 115.　その後，ルートは，1945年３月，一旦チェ

ルナウツィにもどるが，46年４月，ウクライナ領となったブコヴィナからルーマニアに脱出した。1946年11月，当時，ホロコースト生存者のパレスティナへの非合法渡航を助けていたシオニストの組織ブリハの手引きにより，ユーゴスラヴィアから出港，１年以上，キプロス島に抑留された後，48年はじめにパレスティナに到着した。ブリハの活動については，野村真理『ホロコースト後のユダヤ人 ―― 約束の土地は何処か』（世界思想社，2012年）を参照。

24）*The Third Reich and the Holocaust in Romania,* p. 47.

25）ibid., p. 48.

26）Ioanid, op. cit., p.289.

27）Ancel, *Transnistria,* Vol.1, p. 531.

28）*Final Report,* p. 179.

29）リトアニアとラトヴィアのホロコースト認識については，第Ⅲ章注15）にあげた拙稿を参照。戦後ポーランドの状況については，前掲拙著『ホロコースト後のユダヤ人』の第１部，第１章を参照。

30）第Ⅲ章の注３）を見よ。

31）Nicolas Sylvain, Rumania, in: Peter Meyer, Bernard D. Weinryb, Eugene Duschinsky, Nicolas Sylvain, *The Jews in the Soviet Satellites,* Syracuse 1953, p. 505.

32）Radu Ioanid *The Ransom of the Jews*. *The Story of the Extraordinary Secret Bargain between Romania and Israel,* Chicago 2005, pp. 185-186.

33）Michael Riff, *The Face of Survival*. *Jewish Life in Eastern Europe Past and Present,* London, 1992, p. 216.

34）Cf. Alexandru Florian, Treatment of the Holocaust in Romanian Textbooks, in: Randolph L. Braham（ed.）, *The Tragedy on Romanian Jewry,* New York 1994.

35）*Final Report,* p. 345.

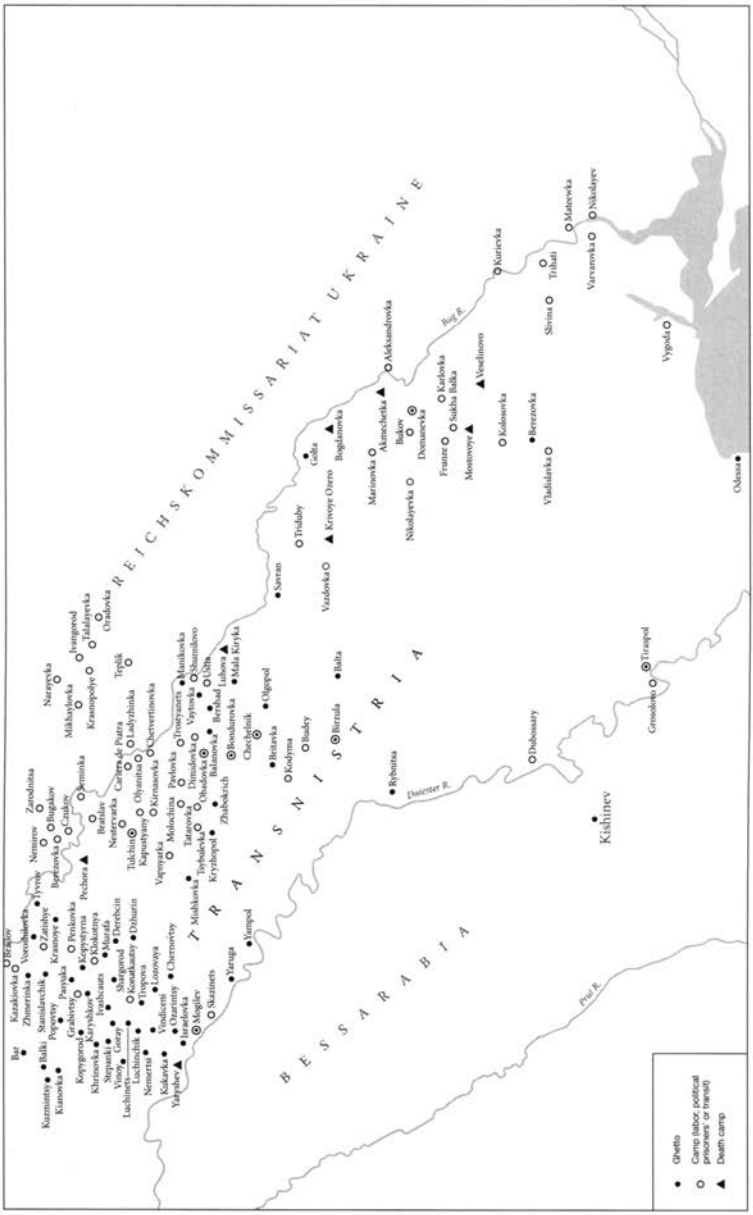
36）M. Carp, *Cartea neagră*. *Fapte şi documente*. *Suferinţele evreilor din România, 1940-1944*, 3 Vols. Bucureşti 1946-47.

37）Cf. Victor Eskenasy, The Holocaust and Romanian Historiography: Communist and Neo-Communist Revisionism, in：Braham（ed.）, op. cit.

38）本稿でしばしば引用した*Final Report*がそれである。

本稿は，科学研究費補助金：基盤研究㈫「戦後ユダヤ世界の形成とパレスチナ問題の『否・解決』―― 学際的研究をめざして」（研究代表者：野村真理，課題番号26370855）および基盤研究㈭「東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争」（研究代表者：橋本伸也，課題番号25284149）による研究成果の一部である。

地図６　トランスニストリア



(*Encyclopaedia Judaica*, 2nd ed., Vol. 20, p. 103.)

地図7　ルーマニアの領土の変遷

(伊東孝之他(監修)『新訂増補 東欧を知る事典』平凡社，2001年，763ページ。)

写真４　キシナウ，エルサレム通りのゲットー記念碑

（2015年９月８日 筆者撮影）

写真５　キシナウ，オルヘイ通りのファシズム犠牲者の記念碑

記念碑奥の谷間が1941年８月アクションの現場のひとつとなった。
(2015年９月８日 筆者撮影)

写真６　ブカレストのホロコースト記念碑

2009年に建てられた。
（2013年８月25日 筆者撮影）